

ローカル線存続のための地域の取り組み

佐藤信之*

問題意識

地方のローカル線の沿線では、地域の中核的な駅でさえ駅前の活気が無くなった。郊外のロードサイドに商業活動がシフトし、旧市街地の商店は顧客を失って、シャッターを下ろす店舗が増えている。生活に必要なものは郊外にできた大規模な駐車場を備えたショッピングセンターで買い揃える。働き手は自家用車で通勤し、ついでに子供を学校に送り届ける。農家は軽トラックで畑に出かけて収穫物を農協まで運ぶ。生活の全てが自家用車なしには動かなくなってしまった。

昭和40年代から、地方のローカル鉄道はいろいろな問題を抱えるようになった。たとえば、モータリゼーションの進行、過疎化、国鉄貨物の縮小、特定地方交通線などである。一つの問題が解決しないまま、新たな問題が発生するという、負のスパイラルに陥ってしまったという感じがする。そのような状況の中で、徐々にその路線数を減らしていった。なかには存続の議論が十分に尽くされないままに廃止されたものもある。採算ベースで鉄道が経営されている以上仕方が無いとすべきであろうか。

しかし、ローカル鉄道の存廃問題は、当事者にとっては切実である。自家用車の方が圧倒的に便利な社会環境の中で、あえて鉄道を利用する人達の中には、鉄道以外に足の便を持たない交通弱者といわれる人達も多い。また、地域全体で見れば、採算ベースの計算には入らないさまざまな便益が存在していると言えよう。

ただし、この問題はきわめて地方的であるので、鉄道を維持すると判断するのは地域の住民でなければならない。すなわち、地域の住民が、現に存在する鉄道を一つの共有資産として生かしていくという発想の転換が前提条件となる。地域が、今後も長く鉄道を存続させたいという認識で一致したならば、そこに公共による適切な支援が求められる。長い間適切な設備投資を行わず、切り詰め続けて疲弊している鉄道も多い。今後何十年も運行を続けるには、それなりの設備投資が必要である。もともと設備投資に十分な収益を上げていなかったわけであるから、その設備投資の負担に耐えられない鉄道も多い。このような一時的な大きな支出は公的な支援抜きではなかなか実行できない。



ローカル線のイメージ写真

(上) JR東日本五能線 艦作(へなし)駅

(中) JR東日本五能線 車窓風景

(下) 十和田観光電鉄 車内風景

地方鉄道再生、路線存続のためのポイント

ここで、なぜ鉄道なのかという問いかけに答える必要があるだろう。公共交通は路線バスでも十分にその機能を果たすことができる。しかし、バスに対して鉄道の優れている特性は、その存在感である。「津軽鉄道」と聞けばすぐに「ストーブ列車」を思い浮かべる。「銚子電鉄」といえば「濡れ煎餅」である。地方のローカル鉄道に関する話題は、全国メディアに好んで取り上げられる素材になっている。

テレビにもローカル線の旅番組が人気を得ている。同じような観点で「路線バスの旅」を扱う番組もあるが、視聴者には鉄道の方が受けが良い。このように、鉄道には、地域のメッセンジャーとしての機能があるのではないかと思う。ローカル鉄道に乗り観光バスで大挙して団体客がやってくるのが現状である。

鉄道は結局は移動のための単なる手段なのであるけれど、ローカル鉄道に人々の関心が向くことで、沿線の、もともと省みられることの無かったものが価値を生み出すことにつながる。「のら猫」でも、駅に居れば多くの観光客を集める観光資源になる。沿線の魅力に気づかせる道具がローカル鉄道なのである。

鉄道が人々の関心を集め、地域の住民が沿線の魅力を見つけ出して全国に向けて紹介する。そして、鉄道目当てでやってくる観光客を街なかに引っ張り出す。それにより、駅前に賑わいが戻る。郊外に出てしまった商業活動が旧市街地に戻ってくる。これが目指すべき方向性なのであろう。いつしか実をむすぶであろうという思い入れで、鉄道会社は、日々地道な取り組みを進めているのである。

最近感動したイベントに、9月2日から6日まで津軽鉄道芦野公園駅の駅前で開かれた野外劇がある。

駅のホームを芝居の舞台とし、劇の幕開けは、役者がまさに定期列車から降り立つ場面であった。映画やテレビで活躍する俳優を主演に配し、地元の人達を脇役にし、地元出身の太宰治の小説「津軽」を素材として取り上げた。鉄道のメッセンジャーとしての役割に気づかせるのに十分な取り組みであった。

実は、これは鉄道会社による顧客獲得のためのマーケティングにつながる。かつては、赤字になれば値上げをし、旅客が減ればサービス水準を下げて赤字を減らして、いずれは廃止ということになった。マーケティングという視点が抜けていた。今や、鉄道会社の社長が、自ら旅行会社やマスコミにセールスに出かけるようになった。観光客を集めるために、常に話題を提供して人々の関心をひきつけ続けている。

10月5日長野県上田市に出かけた。北陸信越運輸局が主催するシンポジウムの基調講演のためであった。講演前に上田電鉄の上田～別所温泉間を1往復した。別所温泉の古い駅舎にちなんで「大正ロマン」をテーマに駅が設えられ、上田駅と別所温泉駅には袴姿の若い女性が駅頭に立っていた。高架線の近代的な上田駅とVVVF制御の最新式電車と対照的である。観光客受けする装置立てとともに、生活交通として沿線の人達が便利に電車を利用するための利便性の向上もまた必要であることに気づかされた。



ひたちなか海浜鉄道那珂湊駅のおさむ君



津軽鉄道芦野公園駅での野外劇



大正ロマンで演出する上田電鉄別所温泉駅



高架線を行く近代的な電車 上田電鉄上田駅